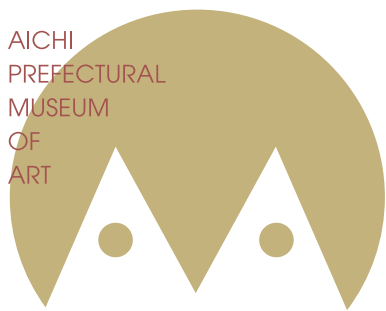


AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART



MEMBERSHIP

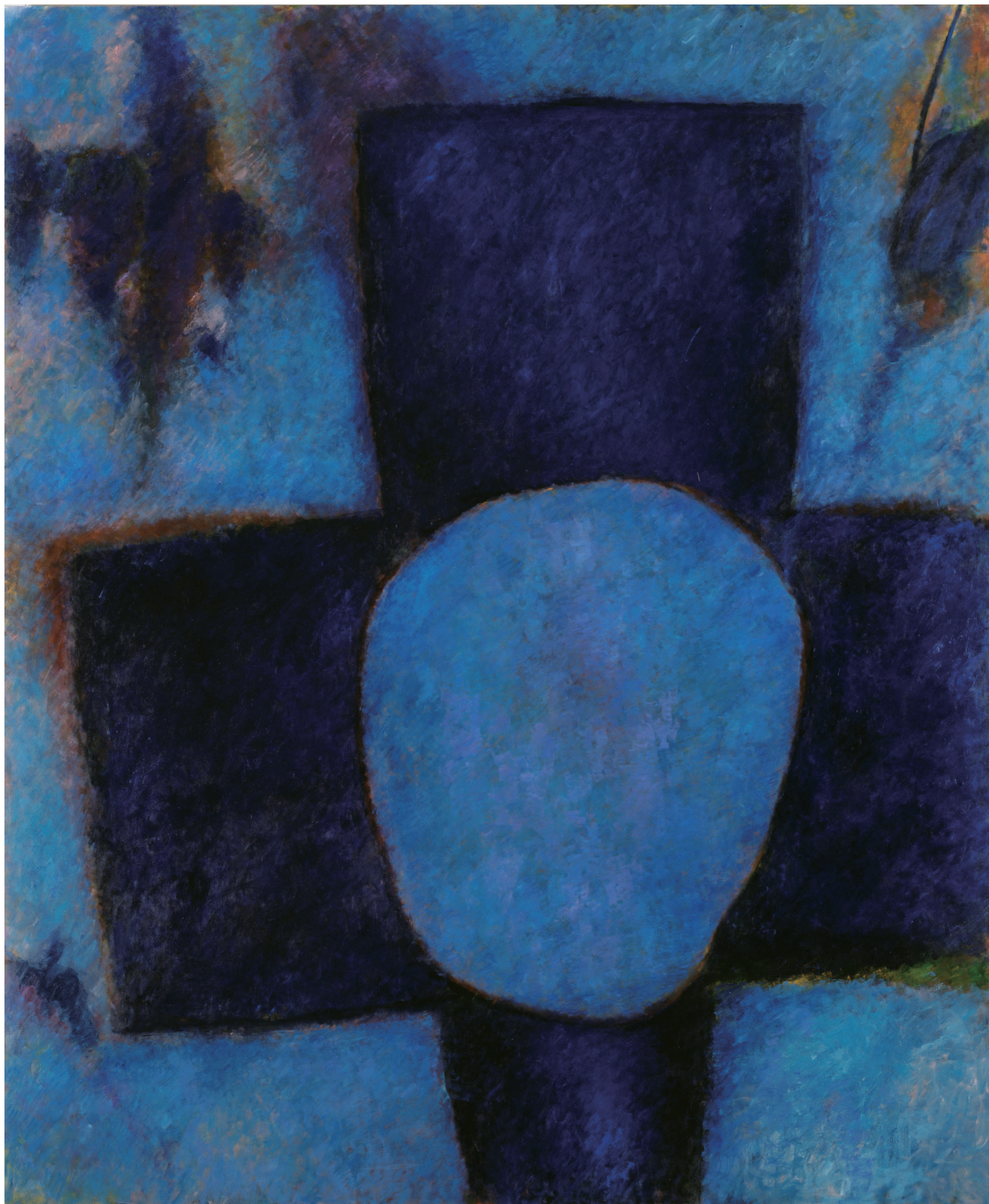
愛知県美術館友の会 会報 第50号

空中回廊

コレクションから：辰野登恵子《Untitled 95-1》 ・ 新収蔵作品の紹介

企画展：トライアローグ展

会員のひろば：新しい試み「おうちで美術鑑賞会」「鑑賞会」



辰野登恵子《Untitled 95-1》

辰野登恵子 《Untitled 95-1》

愛知県美術館館長 南 雄介

1995年は、辰野登恵子（1950-2014）の芸術の軌跡をたどる中で、もっとも重要な年の一つと位置づけられるのではないだろうか。もちろんそれは、この年の9月から10月にかけて東京国立近代美術館で大規模な個展が開催されたからなのだが、もう一つ挙げておきたいのは、同じ年の3月に開館した東京都現代美術館の開館記念展への出品である。愛知県美術館に所蔵されている辰野の絵画作品《Untitled 95-1》は、この展覧会に出品されたものであり、また、当時、私は、東京都現代美術館の学芸員として辰野の展示を担当したので、そのときのことを書いておきたい。

東京都現代美術館の開館記念展は、「日本の現代美術1985-1995」と題され、その時点での過去10年間に国内外で活躍した日本の現代作家18人を選んで構成されたグループ展だった。ここでとくに記しておきたいのは、いわゆるホワイト・キューブの、しかも天井高が6メートル以上という大空間は、このときまで日本に存在していなかったということである。この空間に負けない作品を制作し、展示を実現するというプレッシャーは、作家たちにとってはかなり大きなものだったに違いない。辰野に割り振られたのは、約15メートル四方くらいの正方形に近い空間で、壁の高さは6.5メートル。さらにその上に、高さ3メートル以上のトップライトがあったので、空間のヴォリュームとしては10メートル近い高さがあった。この未経験の巨大な空

間に対して、辰野は、きわめてシンプルな正攻法のプランで挑んだ。すなわち、すべて新作で300号の大作を7点、出品するというものである。F300号のキャンバスは291×218cmであるから、縦に使うと小柄な辰野の身長の二倍近い大きさになる。さらに、中でも2点は、通常よりも幅が20cm大き

い、291×238cmの変形キャンバスであった。インスタレーションや写真に注目が集まっていた時期で、絵画を主な表現媒体としていた作家は、出品作家中4人に限られていただけに、辰野には、絵画の魅力や可能性を示したいという気持ちもあったのではないだろうか。

その後、私は2012年に、辰野登恵子と柴田敏雄の二人展を国立新美術館で企画し、辰野とともに出品作品を選んでいるのだが、その時に感じたのは、やはり大きな作品、なかでも300号を超える作品には、彼女は特別の思いを抱いているということだった。辰野は、一点の作品にかなり時間をかけて描き込んでいくタイプの画家であり、その分、作品の数は多いとは言えない。



辰野登恵子《Untitled 95-1》
1995年 油彩、画布 291×238cm

300号を超える作品となると、じっさい、かなり数が限られてしまう。そのことを思うと、東京都現代美術館の展示には、辰野は格別の意気込みを持って取り組んだと言ってもいいと思うのである。

東京都現代美術館の開館は、1995年の3月20日と決まっており、開館記念展は、展示をしてから写真を撮影し、カタログに掲載する予定だったので、作品の集荷は早めに設定されていた。辰野のアトリエに作品を集荷に行ったのは2月14日のヴァレンタイン・デーのことで、その時には7点すべてが完成していた。私は、そのひと半月ほど前の1994年12月27日に、アトリエに制作中の作品を見に行っている。その時アトリエには制作中の300号の作品が4点あり、このうち一点はほとんど仕上がっていたが、《Untitled 95-1》を含む三点は制作途中だった。なかでもこの時点での《Untitled 95-1》は、中央に完成作のいびつな円の代わりに紡錘形があり、さらにその内側には長方形が描かれているなど、完成作とはかなりへだたりがあって、色調も、完成作のブルーとターコイズでは



1994年12月27日 筆者撮影

なく、濃いブルーと温かいイエローという配色だった。辰野の作品が、制作の途中にどんどん変化していくことは、多くの人が証言しているのだが、この作品も例外ではなかったのである。

展示に際しては、搬入された7点の作品のうち、どれをセンター・ピースにするべきなのか、担当者の私も、そしておそらく作家自身も、ほとんど迷いがなかったように思う。ほぼ正方形の部屋の対角線上に入口と出口が配された、展示が難しい空間で、そしてじっさい、どこに何を置くか何度も迷って配

置をいろいろ試してみたのだったが、入って正面の最も重要な壁にどの作品を置くかは、自ずと決まっていた。全体のスケール感、豊かな、内側からみながるような形態、複雑に重ねられた、輝くような色。《Untitled 95-1》が、辰野登恵子の画業の中でもっとも充実した、素晴らしい作品の一つであることに、疑いはなかった。その印象は、二十数年の時間が経った今でも変わらないし、私が最も好きな辰野の作品の一つである。

令和2年度 新収蔵品の紹介

愛知県美術館副館長 拜戸 雅彦

「コロナ禍で困っている若手アーティストたちの作品を美術館で購入」という、愛知県知事からのリクエストからすべてが始まった。「コロナ禍」は説明するまでもないが、どうして「困っている」のか。基本的に、アーティストたちは作品を作り、それを発表し、コレクターに購入してもらうことで収入を得る。しかし、コロナ禍によって予定されていたギャラリーやアートフェアでの展示の機会が減り、コレクターとの接点が失われてしまったのである。「若手」は定義の問題だ。美術界に限らず、どの世界でも新進、若手、中堅、大家、大御所、などという言い方はできるが、どの年齢までを含めるかは、業界や状況に応じた判断となる。今回は50歳までとした。「購入」というのは、愛知県が基金という貯

金のような形で確保している美術作品購入予算を、前倒しして使いなさい、という意味である。しかも、速やかに手続きをして、お金がアーティストに届くようにしなさい、と。

一見して問題はないように思える知事の提案が、公



横山奈美《Sexy Man and Sexy Woman》2018年 油彩、パネル張り画布 194×400cm

立美術館にとって冒険的なのは、この「若手」という枠である。展覧会で若手の作品を一時的に借りて美術館で展示し、その活動を評価したりサポートしたりすることはある。しかし、その収集となると、留保が必要となる。というのも、収集という行為は、美術の歴史の中に名前とその作品を刻むことになるからだ。通常、公立美術館での購入を決めるのは、そのアーティストとしてのキャリアが一定の到達点と評価に達してからである。到達点を示す傑作を公立美術館が収蔵して後世にしっかりと伝えるという考え方だ。だからこそ今回の提案は、アーティストとしてこれから成長していく人をあらかじめ歴史に刻んでしまうような、奇妙な感覚をもたらすのだ。しかし、こうした感覚を持ちながらも、これまで通りのプロセスで、収集すべき

作家と作品リストを作り、外部の有識者で構成される収集委員会に諮問して承認してもらう手続きを取る。

現代人に共有されているような「美術館」という場所がヨーロッパに成立して、200年が経つ。この200年を「まだ」とするか「もう」と考えるかは、人によって違う。美術制作そのものも、さまざまな要因で日々変化する。美術を評価する軸、つまり批評も日々変化し、それに伴って美術を記述・歴史化する美術史の更新が進む。当然のことながら美術館も変化する。

だから、どの作品をどのタイミングで収集するのかというインプットの考え方も、日常的に更新していく必要があるのだ。そしてそのインプットとともに、どうアウトプット、つまり公開していくのが問題となる。両方が実に難しい。

トライアローグ

2021 TRIALOGUE 4.23^{FRI} - 6.27^{SUN}

「トライアローグ」という耳慣れないタイトルは、モノローグ（独白）でもダイアローグ（対話）でもない、三者による鼎談を意味する言葉です。国内の各地域を代表する3つの公立美術館である横浜美術館、愛知県美術館、そして富山県美術館（以下横浜、愛知、富山と表記します）のコレクションは、いずれも20世紀の西洋美術を収集の柱のひとつにしています。この3館から粒ぞろいの作品を持ち寄れば、海外の美術館からまとめて作品を借りる「〇〇美術館展——珠玉の〇〇コレクション」みたいな展覧会に負けない、20世紀西洋美術の歴史を辿れる展覧会が作れるのでは！というのが、本展の目論見でした。新型コロナウイルスの流行で、海外からの作品借用が難しくなったこの状況下で、国内の豊かなリソースを結集した本展の開催は、なんと時宜を得たことかと自画自賛したくなりますが、実はコロナ禍以前から企画は進んでおり、タイミングはまったくの偶然です。

見どころはもちろん3館選りすぐりの作品であるのは前提として、せっかく3館が協力し合う展覧会なのだから…ということで、3館のコレクションが共通して所蔵する作家の作品を見比べる「Artist in Focus」というコーナーを設けました。ピカソ、レジェ、クレー、アルプ、エルンスト、ミロ、デルヴォー、ダイン、ウォーホルについて、この3館持ち寄りによる競演が楽しめます。

愛知のコレクションについてはよくご存知（のはず？）の友の会の皆さんにぜひお薦めしたいのは、愛知で見慣れているはずの作家の、別の作品です。たとえばピカソであれば、愛知からは青の時代の陰鬱な《青い肩かけの女》、横浜からは目や鼻や口の配置を大きく歪めた《肘かけ椅子で眠る女》、富山からは異なる角度から描かれた顔を合成したかのような《座る女》を持ち寄ることで、ピカソの女性肖像画の様式の変遷をたどることができます。レジェの《緑の背景のコンポジション（葉のあるコンポジション）》は、ほぼ同時期の、やはり「コンポジション」というタイトルを持つ横浜と富山の作品と並んでおり、葉や雲のような自然物と機械部品やインク壺といった工業製品とを同列に並べて描くレジェのやり方にも、豊かなバリエーションがあることに気付かされます。あるいは暗い茶褐色のカーテンがかかっているかのような、富山のモーリス・ルイス《ダレット・シン》。愛知でおなじみの《デルタ・ミュー》の数年前に制作された作品ですが、茶褐色の色面の縁をよく見ると、オレンジや青、緑、紫といった鮮やかな色彩が重なり合っ



パウル・クレー 《攻撃の物質、精神と象徴》
1922年 油彩転写・水彩、紙 横浜美術館



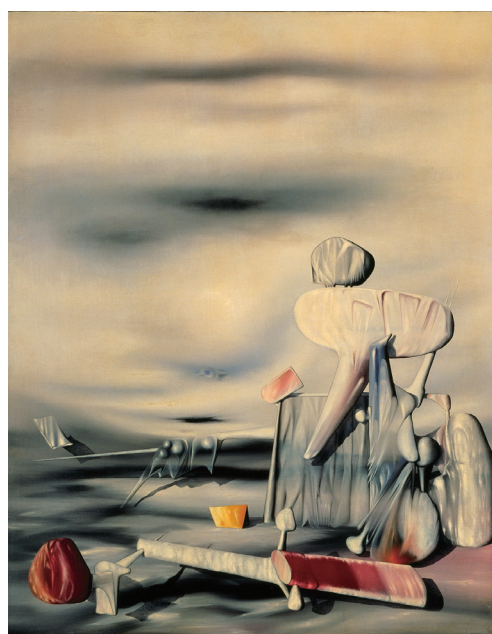
フェルナン・レジェ 《インク壺のあるコンポジション》
1938年 油彩、カンヴァス 富山県美術館



モーリス・ルイス《ダレット・シン》
1958年 アクリル絵具、カンヴァス 富山県美術館

ていることがわかります（《デルタ・ミュー》は大きすぎて持ち運びできないため、泣く泣く本展への出品を断念しました…。ぜひ心の中で並べてみてください）。

一方で、愛知にはない作家の作品もたくさんあります。2011年度に回顧展を開催したにもかかわらず、愛知には絵画の所蔵がないジャクソン・ポロックは、富山から良い作品が来ています（愛知もポロックの版画作品を2020年度に購入したので、お披露目をお楽しみに！）。シュルレアリスムと言えばこの人、というダリやマグリットも、横浜と富山は佳品をお持ちですが、愛知には残念ながら所蔵がありません。横浜は特にシュルレアリスムに力を入れたコレクションで知られていますし、富山はベーコンやリヒターなど戦後の美術で国内屈指のコレクションを擁しています。一口に20世紀西洋美術と



イヴ・タンギー《風のアルファベット》
1944年 油彩、カンヴァス 横浜美術館

言っても、やはりそれぞれに重点が異なるため、こうして並べることで、お互いの良いところや足りないところが見えてきます。

ともあれ3館からおおよそ120点が集結した本展は、三本の矢というのか、三人寄れば文殊の知恵というのか、このまま全部うちのコレクション展示室に残していってくれたら…！と叫びたくなるような、充実のラインナップ。見慣れた愛知の作品も、横浜・富山の作品と見比べることで、何か新たな発見があるかもしれません。

愛知県美術館学芸員 副田 一穂



ジャクソン・ポロック《無題》1946年
油彩・エナメル・コラージュ、板 富山県美術館



ルネ・マグリット《王様の美術館》
1966年 油彩、カンヴァス 横浜美術館

「新しい試み」

2020年の春から日本を覆った新型コロナウイルス感染症は、友の会活動にも影響を及ぼしました。「3つの密」を避けるということは、ヒトが集まることができない、ということ。所蔵作品の保存活動自粛はもちろん、予定していた講座の中止、バス旅行企画・鑑賞会企画も全て中断を余儀なくされました。

自粛生活が長引くと新たに何かを行おうという意欲も衰えるものですが、「エジプト展」開催のために動いてくださっている美術館の方々を始めとする様々な動きに触れ、友の会でも「今できることを、できる形で」始めようと企画を練りました。

まずは外出することなく、絵画鑑賞をした気分を味わうことができるように、また講座を開催することができない代わりとして「おうちで美術鑑賞会」を企画しました。幸運にも愛知県立芸術大学を退官された設楽知昭元美術学部長が、作品と創作にまつわるお話の撮影を許可してくださり、友の会初の動



ギャラリーにて作品の解説をする設楽知昭氏

画配信を行うことができました。貴重なお話を披露していただき、この場をお借りし感謝申し上げます。

そして少人数での鑑賞会実施。今回初めて、ホームページからのみの申し込みによるイベントを行いました。これまでと異なる案内方法・申し込み方法・実施の鑑賞会では様々なトラブルが生じましたが、予定した3回全てを実施することができました。

新たな活動の試みには改善すべき点は多々ありますが、今後も社会の変化に柔軟に対応した友の会活動を企画していきたいと考えています。

2020年10月18日

岡崎市美術博物館「小宇宙の精華 インド宮廷絵画」展 鑑賞会

With コロナ企画第一回、岡崎市美術博物館での《小宇宙の精華インド宮廷絵画》展へ行ってきました。ご時世柄人数制限をかけた開催です。

13時30分、今泉岳大学芸員のギャラリートークが始まりました。

入口正面には今泉さん制作のレゴでできた真っ白な



入場前の集合写真。踊る女性、実は数cmの絵です。

モスクと、ふたりのインド女性が両手を挙げて踊っている絵画の等身大パネルが、左右対称で飾られています。

インドでは「一枚の絵と観る人は一対一で向き合って対話するもの」という絵画観があります。そのため会場ではところどころに一人用のブースが設けられ、ミニチュールとよばれる細密画とじっくり向かい合える工夫がなされていました。

特徴的なインドの黄色は、驚いたことに雄牛の尿から作られているとのことでした。

畠中コレクションにはアンティークテキスタイルもたくさん収集されていて、額装のマットにも使用されています。会場二か所に天井から下げられたシルクはどれも透明感あふれる繊細さに満ちていました。

2020年11月1日 徳川美術館「殿さまが好んだヨーロッパ」展 鑑賞会

With コロナ企画第二回は、徳川美術館での《殿さまが好んだヨーロッパ》展でした。

まずは別室にて神谷浩副館長のレクチャーがありました。神谷さんは、長年名古屋市博物館・名古屋市美術館で副館長を務め、今は徳川美術館に在籍していらっしゃいます。当初は公立と私立との違いにいろいろ驚かれたようですが、このコロナ禍で民間の強みも感じているそうです。

今回の展覧会は、今までまとまったかたちで紹介されることがなかった、尾張徳川家伝来の日欧貿易関係



神谷氏を囲んでの集合写真



展覧会の説明をする神谷浩副館長

品が多数展示してあります。尾張徳川家は將軍を輩出することはありませんでしたが、御三家の筆頭としていわゆる「お宝」（＝家康の遺産）はたくさん伝えられているということでした。それらを主に所蔵している徳川美術館は、いわば正倉院のような役割を担っていると神谷さんはおっしゃいます。

殿さまたちが感激したと思われる、当時最先端の異国のコレクションを一堂に会した展覧会は、なかなかお目にかかれぬ貴重なものでした。

2020年11月15日

愛知県陶磁美術館「YAYOI・モダンデザイン ニッポンの美、ここに始まる」展 鑑賞会

愛知県陶磁美術館で「弥生時代」をとり上げると聞くと、白めのシンプルな形の土器がずらり…と思いきり描きませんか？ しかし展示室には様々な色・形・素材の展示物が並んでいました。

新型コロナウイルス感染症対策のために特別に設けていただいたスペースで、展覧会担当の小川裕紀主任学芸員がみどころを解説してくださいました。この展覧会は弥生時代の遺物をかたち・色彩・紋様・デザインに焦点をあてて構成しています。各章のみどころのなかで色の出し方、素材、つくり方等を丁寧に解説していただきました。そして描かれているもの・使われているものの背景や思想、社会の変化を伺っているうちに、弥生文化そのものの奥深さ、おもしろさが少しずつ見えてきます。

お話を思い出しながら展示室を巡り直すと、遺物



弥生時代の素材の転換について説明する小川裕紀主任学芸員

からは製作過程の途方もないエネルギーを感じ取りました。そして確かに、一見シンプルだが実はよく考えられており手間暇かけて創られている日本の美と文化の要素が、そこにあると思いました。



理事会から

平成4年に新しく愛知芸術文化センターができ、愛知県美術館が開館しました。会報の創刊号には会長の井関弘太郎氏が「芸術は総合なり」という寄稿の中で、総合的な芸術文化センターへの期待が述べられています。また当時の浅野徹館長は「新しい友の会 相互協力の試みという」と題して、友の会の目的が、美術館との相互の協力関係を基本としていることを強調されています。

平成7年11月発行の第2号には、会報の名称を募集し、杉山博之さんから提案された「空中回廊」に決定したとあります。当時の事務局は会報の編集者でもあった村田真宏氏（当時愛知県美術館学芸員、現豊田市美術館館長）でした。その名を冠した号には次のように書かれています。

「20世紀末に出現した美術館の回廊は、空中に浮かぶことで左右に開かれているばかりか、上下にも開かれて、より自由な出会いと体験の場となるであろう。」

新しい生活を余儀なくされるなか、美術を楽しむ方法も様々に試みられています。本誌が名前のように空中の雲（クラウド）にかかる回廊のように広い世界につながるメディアになることを願っています。

(友の会会長 小林克敏)

編集後記

今年度はコロナに翻弄され、当初は美術館の展示も友の会の活動も中止を余儀なくされました。今は対策をしながら活動内容を模索しています。イベントなども元通り行える日が待ち遠しいです。

- 編集 松下智子 稲垣真美代/井上真紀子/喜田泉/小林克敏/畠永晃一/森健次
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2021年3月

第50号 友の会活動紹介 2020年10月～2021年3月

- 10月 鑑賞会 岡崎市美術博物館 「小宇宙の精華 インド宮廷絵画」展★
- 11月 鑑賞会 徳川美術館 「殿さまが好んだヨーロッパ」展★
- 11月 鑑賞会 愛知県陶磁美術館 「YAYOI・モダンデザイン ーニッポンの美、ここに始まるー」展★
- 11月～12月 おうちで鑑賞会 「設楽知昭退任記念展」解説動画配信★
- 2月～4月 「GENKYO 横尾忠則」展 解説動画配信 (南雄介館長)



展示会の概要を語る神谷副館長

定例活動

所蔵品管理	モニター	発送	受付 <small>（票）</small>	広報	ホームページ	理事会
0回	1回	2回	4回	5回	随時更新	5回

友の会 これからの活動予定 (変更の可能性あります)

- 4月 特別鑑賞会 トライアローク展
- 5月 友の会講座 奈良大学教授 関根俊一氏 「正倉院宝物の輝き」
- 6月 友の会総会 記念講演会

これからの展示会のご案内

横浜美術館・愛知県美術館・富山県美術館 20世紀西洋美術コレクション

トライアローク

2021 TRIALOGUE 4.23^日 - 6.27^日

◇電話対応について
事務局の勤務が不定期となるため、電話での対応ができないことがあります。お問い合わせ、連絡などは、郵便かFAX、Eメールにてお願いいたします。

◇イベントへの申し込み
Web ページからの申し込みも可能になっています。新しい情報は随時更新しますので、ご確認ください。

創刊号

第2号 この号から「空中回廊」という名に

アルナルド・ボモドーロ 《飛躍の瞬間》1984

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目 13-2
愛知県美術館内 (愛知芸術文化センター 10 階)

✉ info@apmoa-tomo.com

ホームページへのアクセスはこちらから

愛知県美術館友の会

apmoa-tomo.com

tel. 052-971-5511 (代)

fax. 052-971-5617

(火・木 11:00~15:00)

twitter [@apmoafriends](https://twitter.com/apmoafriends)

友の会入会のご案内

詳しい内容を知りたい方、入会をご希望の方は事務局 (下記) までお問い合わせください。入会のご案内パンフレットやホームページでも詳しく紹介しております。ぜひご覧ください。

受付場所 ★愛知県美術館 10 階受付
★友の会事務局 ★振込可